

2:16 ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かると激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。

2:17 そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。

2:18 「ラマで声が聞こえる。むせび泣きと嘆きが。ラケルが泣いている。その子らのゆえに。慰めを拒んでいる。子らがもういないからだ。」

＜説教＞

マタイは、神の約束の救い主、キリストとして、神のひとり子イエスがこの世に人となって来られたことによって私たち人間にもたらされた喜びや平和（羊飼いたちや東方の博士たちが受けたような）だけでなく、嘆き悲しみ悲惨についても記しています。ただし、その嘆き悲しみ悲惨の原因是イエスご自身にではなく、私たち人間（の罪と惡）にあります。また人をなおも誘惑し、地獄の道連れにしようと働く悪魔の働きがあります。

イエスのこの世への到来によって「天の御国（神の国）」が近づきました（マタイ 3:2. 4:17）。悪魔の力、支配が打ち負かされ、滅ぼされ、神の完全な御支配が再びこの世に行われる、その時がいっそう近づいたのです。それで悪魔は身震いするのですが、永遠に悔い改めることのない悪魔は逆に怒り、いっそう神に向かって戦いを挑みます。最終的に自分が地獄の永遠の滅びに入れられることを知っている悪魔は一人でも多くの人間を地獄の道連れにしようと必死に働きます。それで、今悪魔の支配下にある人間も悪魔の奴隸として悪魔のわざを行い、悪魔とともに神に反逆し、神に戦いを挑んで行きます。

「この世の国」の王ヘロデはそんな人間でした。ヘロデは「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って東方の博士たちをベツレヘムに送り出しました（2:8）。ところが、博士たちが自分のところに戻ってこなかったことから、博士たちに欺かれたことが分かり激しく怒りました。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させたのです（16）。「ユダヤ人の王」として生まれた幼子が誰で、どの家にいるどの幼子かを特定できない以上、そうするのが確実な方法でした。自分の王位を脅かす危険人物だと自分が疑いをかけた者は、たとえ妻子親戚縁者であっても殺したのがヘロデでしたから、赤の他人の子どもたちを殺すことも普通のことだったでしょう。

ベツレヘムとその周辺一帯の幼児殺害は、自分の地位・立場・権威や権利を守るために手段を選ばない、自己中心の塊の人間ヘロデが起こした事件でした。ヘロデの罪は、心の中の密かな企みに始まり、実際に計画し、行動として実行する全ての過程におけるものです。また、自分が仕えるヘロデの命令とは言え、ヘロデに遣わされ、命令に従った人（たぶん兵士だったでしょう）の罪でもありました。更には、そんなヘロデの顔色を伺ってヘロデに追従していた民とその祭司長たち律法学者たちの罪でもありました。

そのようにしてベツレヘムの幼児虐殺の罪と惡が行われ、全く理不尽に幼い子を殺された母親たちの泣き嘆き叫ぶ声が響き渡りました。マタイは〈そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した〉と言い、エレミヤ書 31:15 を引用しました（17-18）。

この〈ラマ〉は、〈ラケル〉が葬られた場所ともバビロン捕囚の民が集められた場所とも言われています。〈ラケル〉はヤコブの妻の一人で、イスラエル12部族の父祖となつたベニヤミンの母、エフライムとマナセの祖母です。エレミヤの時代から100年ほど前、イスラエル12部族のうちの10部族からなる北王国イスラエル(エフライムとも言わされた)が神への背信の罪の故にアッシリアによって滅ぼされ、多くの人が殺されたりアッシリアに捕らえ移されました。そのことをラケルが墓の中で嘆き悲しんでいて、それは慰められることを拒むほどの悲しみだったとエレミヤを通して主なる神は言われました。また、エレミヤの時代、ベニヤミン族が属する南ユダ王国も同じく神に対する背信の罪の故に、バビロンによって滅ぼされ、多くの人が殺されたりバビロンに捕らえ移されるということが起ころうとしており、やがてそれは起きました。北王国にせよ、南王国にせよ、イスラエルの民に起こった、慰めを拒むほどの嘆き悲しむべき悲惨の原因は、神に反抗し、背き、立ち返り(悔い改め)をしなかった人間の罪にありました。あのときのラケルと同じ〈むせび泣きと嘆き〉をもたらす悲惨が、幼子イエスを殺そうとし、神に立ち返ろうとしなかった人間ヘロデとその支配下の人間によって再び、新たに起こされました。

そんな私たち人間の罪ゆえの〈むせび泣きと嘆き〉の悲惨(殊にこの地上だけでなく、地獄の永遠の刑罰の悲惨)から人間を救うために、父なる神は御子イエスをこの世に人としてお遣わしになりました。ヘロデは〈人を遣わし〉、その人はヘロデの命令に従い、ヘロデの罪と悪行の共犯者となりました。しかし天の父なる神は、そんなヘロデが(その他多くのヘロデのような支配者が)支配する人間の罪の世に御子イエスを人としてお遣わしになりました。幼子イエスがエジプトに逃れ、ヘロデによって殺されることがなかったのは、やがて十字架で死なれるためでした。イエスは生涯御父のご命令、御意思に全くお従いになり、私たちの罪のために〈十字架の死にまで従われました〉(ピリピ2:8)。

ヘロデが〈博士たちに欺かれたことが分かると激しく怒った〉にある「欺く」と訳された言葉は、「嘲る、からかう」とも訳される言葉で、マタイ、マルコ、ルカの各福音書の中で13回使われていますが、そのうち11回はイエスの十字架に関係する場面で使われています。〈欺かれた(嘲られた、からかわれた)〉ときに〈激しく怒つ〉て幼子イエスを殺そうとして〈ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させ〉、そうやって他人の命を犠牲にして、自分の地位・権力を身を守ろうとしたのがヘロデでした。

一方、イエスは嘲られてもからかわれても怒って他人を殺すのではなく、〈辱めをものともせずに十字架を忍び〉(ヘブル12:2)私たちの罪のために十字架で死なれました。十字架の死に至るまで神への従順を全うされ、神に完全に受け入れられる義を全うされました。そして三日目に死人の中からよみがえられて、罪と死と悪魔に打ち勝って〈神の御座の右に着座され〉(ヘブル12:2)ました。神はそのイエスを信じる私たちの全ての罪を赦し、イエスの義を私たちに与えてくださり、私たちを義人と見なし、神の子として受け入れてくださいます。〈むせび泣きと嘆き〉の多いこの世にあっては慰めと励ましを与え、究極の永遠の嘆きの場である地獄の滅びを免れさせてくださいます。

このように、神に背き続けて来た罪深い人間、私たちの確かな望みはイエス・キリストだけにあります。エレミヤ書の続きの中で主は言われます「あなたの泣く声、あなたの目の涙を止めよ。あなたの労苦には報いがある」(エレミヤ31:16)。「あなたの将来には望みがある」(同17)。「わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ」(同

31)。「わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさない」(同 34)。この神の約束はイエス・キリストによって(その罪無き生涯、十字架の死、復活、昇天、神の右への着座、聖霊の特別な注ぎによって)確かに成就しました。その約束はイエス・キリストにあって、今やイスラエルの民だけでなく、私たちにも語られ、分け与えられています。

今年も「この世の王(たち)」はますます人の命を軽んじ、自らの欲望と利益を追求し、多くの人の血を流す悲惨な争いに明け暮れるでしょう。そんな世にあって私たちも嘆き泣くことがあるでしょう。それでも、主イエスだけに望みを置き、主イエスのうちに留まり、主イエスに従い、主イエスにある確かな望みを証して歩みたいと願い、祈ります。